

侯爵令嬢ソフィアの結婚

登場人物紹介

グレゴリー

昔、ソフィアの家で
雇われていた使用人。
ソフィアに貴族令嬢としての
教育を施した。

レスリー

ヴィンセントの兄。
自由を愛する気質で、
頻繁に外国に行っている。

シャーロット

ヴィンセントの姉。
明るく、思いやりがある。

ダニエル

シャーロットの夫。
平民だが有能な人物。

ソフィア

シューマン侯爵家の令嬢。
父親に愛されず、
孤独で貧しい環境で育った。
辛い状況でも前を向こうとする
心根の持ち主。

ヴィンセント

バトラー男爵家の次男。
身分違いゆえに結婚ができない
公爵令嬢の恋人がいる。
侯爵家の利権を求めて、
ソフィアと契約結婚することに。

第一章 挙式

ソフィアは泣いていた。勢いよく転んでしまつて石畳に打ちつけた掌からはじんわり血が滲んでいる。それに口の中は血の味がした。唇を切つたのだ。

「ああ……痛いね、それは」

そう言つて差し出された手。うつ伏せのまま顔だけ上げて見ると、秋の空のように澄んだ青い瞳が見下ろしていた。優しい男の子はゆっくりと微笑んで、さらに手を差し出して――

ソフィアはそこでいつも目を覚ます。幼き日の記憶。何年も前だというのに、今朝も同じ夢を見た。

ソフィアはもう子どもではない。その証拠に今は自身の結婚式を挙げるために教会へ向かつていた。

豪華な馬車は、これまで乗ったものの中で一番高級なものだった。座席の生地は滑らかで柔らかい。そして、そこに広がるソフィアのドレスの生地といたら、ここバルガリア王国の首都シュリアでもなかなか見ることのできない特級品だった。

ソフィアは純白のウエディングドレスを撫でて、自身の緊張を和らげようとしていた。

結婚相手のヴィンセント・バトラーは、辺境の地で生活しているソフィアにすら噂が届くほどの有名人だ。ブロンドの髪が美しいが、何よりそのグリーンアイに見つめられると息が止まりそうになるほど美青年らしい。

「グリーンアイってどんな感じかしら……」

ソフィアは独りごちる。希少な瞳の色なのだ。ソフィアの瞳の色はヘーゼルで一般的によくある色だし、美しいとされている青い瞳もこれまで何度も目にしてきたが、グリーンアイはこれまで見たことがない。結婚に夢を見ることはないが、そのエメラルドとたとえられる瞳を見ることはこの結婚の唯一の楽しみだった。

馬車は速度を落として小高い丘の頂上にある教会の前に停まった。ガタンと大きく揺れたあと、馬車の戸が開けられた。御者が中を覗き、ソフィアに手を差し出す。

「それでは侯爵令嬢ソフィア・シューマン様、教会の中へご案内いたします」

さすが、貿易で巨万の富を築いたバトラー男爵家であつた。御者の服すらソフィアが普段着ているものより数段いい毛織物を使っている。若くはつらつとした御者の手を借り、ソフィアは五月の清々しい丘の上へと降り立った。

「ありがとうございます」

御者に顔を向けると、相手は微笑んでうなずいた。もしも、この人が結婚相手であればソフィア

の心に春風が吹き込んでくる思いだっただろう。

教会は白亜の建物で、各所にステンドグラスがはめられた立派なものだった。風は優しく、木々の若葉は薄黄緑で柔らかい。小鳥のさえずりも彩りを添え、これ以上ない素晴らしい日であつた。

待ち構えていた初老の女が、若い侍女を伴い、そそくさとやってくる。侍女の腕にはベールとブーケが抱えられていた。

初老の女が仏頂面のままソフィアの真正面に立った。

「バトラー家家政婦長、ガルシアにございます。よろしく願ひいたします」

家政婦長だと名乗った女は間違つても頭を下げたとは言いがたく、まっすぐ前を見据えたままの挨拶はまるで目下の者に対するもののようにだった。

（歓迎されていないのね。そうよね）

ソフィアはこの先の生活に暗雲が垂れ込めていることを感じ取って、暗澹たる心持ちになったが、努めて笑みを浮かべ続けた。

「よろしく願ひいたします。ソフィア・シューマンでございます」

ソフィアの挨拶に若い侍女が慌てて頭を下げたが、やはり家政婦長は微動だにしない。貴族相手に平民の人間がとる態度としては、若い侍女のものが正常だ。ソフィアの場合、堅苦しいのは好きではないのでかしこまる必要はないのだが、それにしても家政婦長の態度は行きすぎた感がある。

「ベールをつけさせていただきます。少し屈んでくださいませ」

口調のせいで叱責されたような不快感を覚えたが、それにもソフィアは表情を崩さず素直に従った。

「美しいベールだわ」

精緻なレースに素直な感想を口にしたが、家政婦長ガルシアにはまるつきり無視された。

ソフィアは心の中でため息を漏らし、辺境の地に暮らす侯爵家の人間など首都シユリアの人からしたら単なる田舎者に過ぎないのだろうと結論づけた。実際、数えるほどしか参加していない首都のパーティーでは散々な扱いを受けてきた。出身地を言ったら失笑されたし、爵位を伝えても取り合ってもらえなかったこともあった。首都での思い出でよかったことといったら、青い瞳の男の子にやさしくしてもらったことくらいだ。

景色はベール越しだとどうしたってぼんやりとしてしまう。ベールをつけ終えた家政婦長ガルシアの仏頂面を見なくて済むのは利点と言ってよかったが、渡されたブーケの花をしっかりと見ることはできないのは少々残念に思った。

（まあ、いいじゃない。こんな私でも役に立つことができたのだから、それで十分だわ）

生まれてからの十九年間、ソフィアは自身の価値を見いだせなかった。この結婚で生まれて初めて父親から喜んでもらえたのだ。愛しているとは一度も言わぬ父だった。そして、夫になる人もソフィアに愛を口にすることはないだろう。

（ヴィンセント様には美しい恋人がいらっしやるのですもの。期待なんてしないわ）

噂に名高いグリーンアイに、ソフィアは映らない。この結婚が形ばかりのものであるのは、皆知っていた。だから、ソフィアにも花嫁らしい高揚感などなく、ただこの美しい日が何事もなく粛々と過ぎていくようにと祈っていた。

白のタキシードに身を包んだヴィンセント・バトラーは睨みつけるようにして書状に目を通していた。

「なんだこれは。半年前に話し合ったときよりさらに金額が上乗せされている。あのとき、条件を出し合って同意を得たはずだったのに」

手元の婚姻契約書には、常識では考えられぬ額の婚姻金が記載されていた。横に立つ執事のトンブソンは、表情を変えぬまうなずいた。

「港の使用権がほしければこれだけ出せということでございます」

記された婚姻金は、遠洋に出られる船が数隻造れる金額だ。いくらバトラー家の商いがうまくいっているとはいえ、十年分以上の利益を費やすことになるのはやりすぎだとヴィンセントは感じていた。それが半隠居を決め込んでいる父の意向だったとしても、だ。

「さすがは偏屈侯爵だな。がめついものにもほどがある。運営している学校の費用が必要なのはわか

るが、あまりにも莫大すぎる。学校運営は高尚なことだが、侯爵の資金集めのやり方がひどすぎて子息を通わせることをためらう親がいるのもうなずける。そもそも、学校に資金をきちんと回しているのか？ 学校は金集めの手段だという噂を信じたくなるな。本当にこんな家と関わりができて我が家に益があるのだろうか」

ブロンドを揺らし吐き捨てるようにヴィンセントが言うと、執事は「残念ながら当家は爵位の中でも最下位の男爵でございます。侯爵は上から二番目の爵位、この結婚で皆の見る目も変わりますよ」と論じた。

ヴィンセントとて理解はしている。もし、ヴィンセントの生まれが侯爵家であったなら恋人クリスティンの家の爵位——公爵の一つ下の爵位になる。その近さなら多少金を積めば結婚も十分許される範囲だ。

この国では爵位がものをいう。肥沃な土地や大規模な港の使用権は上位階級に与えられており、それゆえ財産も唸るほどあつた。政治を司る議会の議長は最上位である公爵から選出されるし、多くの役職は階級順に割り振られている。ヴィンセントの父が、侯爵家と縁付きたいと思うのも当然だった。

爵位のことですら辛酸を舐めてきた父の意向を受け今回の結婚を受け入れたが、そのあたりから父の態度は軟化し、いざれ離婚することもやむを得ないし、そうしたいならうまくやるように、と言うようになった。

宗教上、離婚はよしとされていないが、五年経過しても子をなせなければ、離婚に向けて話し合えることになっていった。この制度を利用し五年後に離婚をする場合は、莫大な婚姻金の代わりに、シューマン家の持っている巨大な港の使用権を手に入れることを事前に取り決めておいた。その場合、侯爵という地位を手に入れることはできないが、港の使用権を求めていた父にとっては些細なことだった。

「港の権利とて男爵では端の端だしな。高位貴族連中は外遊でしか港を使わないくせに。我らは貿易で生計を立てているのだから、あんな端では支障が出ると何度も訴えているのに」

領地をほとんど持たない男爵家が生きていくには商いが必須だ。その点でヴィンセントの家はどこよりも成功していると言つてよかつた。それでも、扱いはよくないので苦々しく感じることもばかりだ。

「今回のご結婚で港の権利をいい場所に移せるならば、総合的にみてお買い得と言つてもいいのではないのでしょうか」

総合的に、というところだけヴィンセントはなぞつて言い、持っていた書状をトンブソンに渡した。これはこの婚姻契約書に署名するという意思表示だった。

「皆は偏屈令嬢を追い出すことを望んでいるのだろうか……それにはそれ相応の理由が必要だ。下手をすれば他の貴族たちから叩かれるだろうしな。こちらは男爵だ、目上の侯爵家相手に失礼なことをすれば、他の貴族が黙ってない」

それではお仕事に差し障ります、と言いながらトンプソンは書状をくるくると丸めて、リングに通した。

「結婚の契約は五年だ。その頃、もう一度大金を渡して異国の地に住まわせることができるればいいが……」

「貿易相手に妾^{めかけ}がほしい者がいないか、当たっておきましょう」

屋内でもはつきりとわかるグリーンアイでヴィンセントはトンプソンを見つめてうなずいた。

「いくら愛情がないとはいえ、妻になる女だ。一応苦勞しないような相手を内密に頼む。地獄へ落としたなどとなったら夢見が悪い」

承知いたしました、とトンプソンは頭を下げて部屋から出ていった。

「ソフィア・シューマンが父親より分別のある人間であるように祈るか」

呟いたヴィンセントはテーブルに用意されていた手袋を掴み、重い気持ちで控え室を出て自らの結婚式に向かうのだった。

祭壇に司祭が立ち、既に待機しているヴィンセントに小声で話しかけてきた。

「本当にいいのですか？ 誓いの言葉も誓いのキスも省くなんて聞いたことがありません」

ヴィンセントは何を今更としか感じない。司祭とてこの結婚が愛のもとにおこなわれるわけでないことを知っているのだ。貴族間の結婚は往々にして契約に過ぎない。そこから本当の愛情が生ま

れることも多いようだが、この結婚はそのようなことはないだろう。

「サインを書くだけで十分です。無益な演技などして長引かせる必要はありません。時間の無駄です」

ヴィンセントの有無を言わさぬ口調に、司祭はため息で返した。

「偽りの愛を誓うよりは神を冒瀆^{ほうとく}しないのかもしれませんがね……それなら偽りの結婚はどうなのかという話になるわけで——」

長年の慣例を破るのはさぞ勇気がいるらしく、何度も話して説得したのにこの期に及んでまだぶつくさ言う司祭に、ヴィンセントは呆れ返って首を横に振った。

「やはり誓いのキスくらいは——」

粘るうとした司祭を制したのは、扉からまっすぐ伸びる光の筋だった。やっと新婦がやってきたのだ。ウェディングドレスを着た女性が静々と通路を歩いてやってくる。慣例も何もあったものじゃない。招待者はゼロ、家族すら呼んでいない、付添人もいない式だ。

ゆっくり歩いてやってくる小柄^{こびれ}で華奢^{きゃしゃ}な女性が、ソフィア・シューマンらしい。もし、まったくの別人が成りすましていても、ヴィンセントにはわからない。会ったこともない相手なのだ。

「待っていましたよ。侯爵令嬢ソフィア・シューマン様」

たどり着いた女性に司祭が声をかけると、「はい。お待たせいたしました、司祭様」と、ベールの向こう側で声がした。それからヴィンセントを見上げ軽く膝を落とす。これは一般的な挨拶に過

ぎないが、仮に表面的なものだとしてもきちんと挨拶してきた相手に、ヴィンセントも染みついた習慣で挨拶を返していた。ここでソフィアが「はじめまして」と挨拶しなかったのはよかった。司祭がそれを耳にしたら、ようやく止まったお小言が再び始まらないとも限らない。倫理的に褒められたことではないと自覚しているとはいえ、もうお小言は聞きたくなかった。

「では始めます。お互いに婚姻契約書は読んで理解しましたか」

司祭がヴィンセントに顔を向けたので、「はい」と答える。次にソフィアも「はい」と言った。

ここにある婚姻契約書は結婚式用のもので細かい取り決めは書かれていないが、事前に取り交わした婚姻契約書には契約結婚であることが明確に示してある。五年後に婚姻関係を解消する場合、婚姻金の返金を求めない代わりに、シューマン家の港の使用権が譲られる契約だ。子ができないことを離婚理由にするため、性的関係は一切持たないことも明記してある。

ヴィンセントはソフィアの声が落ちていて耳に心地よいことに胸を撫で下ろしていた。キンキン声など聞きたくない。少なく見積もっても五年間は関わりのある人物だ。金に貪欲なシューマン家の娘というだけでも最悪なのに、これ以上嫌いなポイントを増やしてほしくなかった。なんといつても、しばらくはヴィンセントの妻を名乗るのだ。

「それではここにサインをしてもらいます。サインをしたときから二人が夫婦となることを認めます。神のご加護がありますように」

ヴィンセントはさっさと羽根ペンをインクに浸すとサインを書いた。ペンを元の場所に戻すと、



ソフィアもそれを手に取りサインを書き込んでいく。さすが学校運営に並々ならぬ執着をみせるシューマン侯爵の娘だけある。整った読みやすい文字だった。

司祭は二人のサインの下に、自らのサインを書き加え、インクが滲まぬよう紙で上から押さえた。これにて結婚式は終了となる。司祭がヴィンセントをうかがっている。ヴィンセントは「ありがとうございました」と司祭に告げ、契約書をもらい受けるために手を出した。

「あとは執事に任せてあるので私はこれにて失礼いたします」

契約書を手にすると踵を返し、歩き始める。熱心な信者ではないにしても、神を欺く行為後に長居するのは気が引けた。

「トンプソン、馬の準備だ！ 役所に向かう」

歩きながら指示を出すと「正面に回してございます」と執事が返す。ヴィンセントは振り返ることなく、「あとのことは頼んだ」と言つて外へと消えていった。

残された司祭とソフィアは無言でヴィンセントの姿を見送った。

先に動き出した司祭がソフィアのためにボールを上げる。ソフィアはとつさに俯いた。置いてけぼりにされた花嫁に司祭は同情しているに違いない。

「気になさることはない。いつだってルールを破る者はいる」

司祭の心遣いにソフィアはあえて笑みを作り、「はい、司祭様。私は気になどしておりません」と気丈に言い切った。

「控え室に私がエスコートしましょう」

老いた司祭の手に、ソフィアは手をのせた。

「光栄ですわ。ありがとうございます」

礼儀正しく返し、ソフィアは俯かないよう努めた。

司祭が「今日という日がこれ以上なく美しいことをお気づきかな？」と、世間話に切り替える。「ええ。林檎の木が若葉をたくさんつけておりました。生命力溢れるこの季節はどこを見ても美しく、感嘆の一言でございますね」

ソフィアも挙式などなかったように会話を楽しむふりをしたのだった。

控え室で純白のドレスを脱ぎ、普段使いのドレスに着替えたソフィアは、どうしたらいいのかわからず、とにかく椅子に腰かけて待っていた。

壁を隔てた向こう側から、誰かの話し声や鳥たちの歌声が届く。静寂に包まれた控え室とはまるで世界が異なるようだ。こんなとき、いつも以上に孤独を感じて寂しくなる。傍らに置かれた鈴蘭のブーケだけが孤独を癒やしてくれた。

今着ているドレスはバトラー家が用意してくれたもので、普段使いといっても実家で着いたものよりずっと手触りがよかった。無意識に生地を撫でてしまい、少し恥ずかしく思ってたやめるのだが、またいつの間にか手が生地を楽しんでしまう。

しばらくしてドアをノックされたので「どうぞ」と答えると、痩せた初老の男性が小箱を手に控え室に入ってきた。名乗らなくてもわかる。この人は執事だ。貴族の家には必ず執事がおり、彼らはある種独特な雰囲気を持っている。多くの権限を与えられている誇りや、洞察力を発揮するため常に張り巡らせた神経が滲み出ているのだろうか。

「侯爵令嬢ソフィア・シューマン様、わたくしヴィンセント・バトラー様付き執事のトンプソンと申します。以後お見知りおきを」

かけていた椅子から立ち上がったソフィアはうなずいて自分も挨拶をする。

「辺境の地より参りましたもので、右も左もわかりません。いろいろとご指導いただきたく存じます」

トンプソンの表情は変わらなかった。部屋にやってきたときから微笑んでいるような、そうでもないような曖昧な表情をしていて、それを一切崩さないものだから何を考えているのか推し量ることはできない。

「ソフィア様は首都シュリアは初めてでございますか？」

「いいえ。参加せねばならないパーティーの際に、何度か来ております」

ソフィアにとって、それらは記憶から消し去ってしまいたい出来事だった。父に連れられてやってきた素晴らしい街に心を躍らせていたら、パーティー会場で大恥をかく羽目になったのだ。どの令嬢よりも貧相なドレスや装飾品、それに加え父の悪評からくる白い目、散々だった。

「なるほど。こちらで買い物などのご予定は？」

「ございませんわ」

ソフィアがほぼ無一文に近い状態で実家から送り出されているのを、この執事は知らないらしい。手持ちの金ではこの街の宿屋に一泊することも難しかった。侯爵令嬢なのに全財産がこれだけだと誰が想像しようか。隠しても仕方がないので聞かれれば答える覚悟ではいたが、誰も聞かないので今のところ恥をかくこともなかった。

執事の片眉が問うように上がったが、関係が浅いソフィアにはそれがどういう意味か理解できなかった。

「では、今後お住みになる家へご案内してもよろしいでしょうか」

ソフィアは黙ってうなずいた。実は長旅から休憩なしで挑んだ結婚式だったので、心身共にへとへとで、早く侍女が待つ家に行きたいと思っていた。

執事はソフィアの前までやってくると、持っていた小箱を恭しく開けた。そこに入っているルビーの首飾りに、ソフィアの目は釘付けになった。見たこともないほど大粒のルビーをダイヤモンドが取り囲んでいる。息を呑む美しさだった。

「結婚時、新郎から新婦へ贈られる伝統的な首飾りでございます。なお、ヴィンセント様はご多忙により直接首におかけすることができませんので……よろしければわたくしがソフィア様におかけいたします」

ハッと我に返ったソフィアは、後ずさりしながら手を振った。

「いえいえ、このようなものはいただけません！　あまりに高価すぎて落ち着きませんもの」

深紅のルビーはソフィアだつて一度は首にかけてみたいと思うものだったが、あまりに似合わないすぎて滑稽^{こっけい}に見えることは間違いないだった。今晚の宿代にも困る有様なのに、こんな立派なものを身につけたら浮くに決まっていた。

「そうは申されましても、これは結婚時におけるお約束事でございます。ソフィア様のご実家の爵位を思えば当然のもの。我がヴィンセント様が金を出し惜しんだと思わせないう、しつかり選んだお品でございます」

受け取ってもらわないと困るという圧を感じて、ソフィアの視線は執事トンプソンの浅黒い顔と深紅のルビーを行き来した。

（困ったわ。ここで固辞したらヴィンセント様の面^{めん}子が潰れるし、とはいえ受け取るにはあまりに高価すぎるし……）

トンプソンはソフィアの心の内を読んだかのように「贈り物を突き返されるのは一番の屈辱でございます。差し上げるものですから、受け取っていただいて、あとは煮るなり焼くなりしていただ

いて結構なのですよ」と、やや意地悪いことを言う。

ソフィアは渋々手を出した。その手がかすかに震えていることにトンプソンが気がついたかはわからない。高価すぎてソフィアは怖かった。トンプソンは何も言わずにソフィアが受け取った箱を見下ろしている。ソフィアは迷いつつも箱の蓋を閉じた。

「大切にいたしますとお伝えください」

かしこまりましたと答えるトンプソンの反応だけでは、受け取ったことが本当に正しかったのかわからなかった。でも、もう受け取ってしまったのだから考えないように努めることにしたのだった。

来たときと同じ馬車に乗り、執事トンプソンに見送られて教会を出た。結婚をした実感はまるで湧かないのに膝にのせた木箱と花束だけがずっしりと重い。

（ヴィンセント様は徹底していらっしゃるわ。妻を娶^{めと}っても顔すら見えないなんて）

丘を下っていく馬車の中で、ソフィアはボール越しに見たヴィンセントの横顔を思い出していた。神の使徒だと言われたら信じてしまいそうなほど整った顔立ち。あの顔にグリーンの瞳を持っているなんて奇跡に違いない。

（そのうえ恋人の公爵令嬢クリスティン様に一途だなんて、ステキだわ）

ソフィアには目もくれないが、それは恋人を大切にしているゆえだから仕方がない。

結婚が決まったとき、ひそかに侍女のキャサリンがヴィンセントの人となり調べてくれたので、臆けながら夫となる人物の情報を手に入れることができていた。とはいえ、侍女のキャサリンも首都に住んでいるわけではないため手に入れられる情報には限界があった。わかったのは、グリーン
の瞳をした美しい容姿の持ち主で、相思相愛の公爵令嬢クリスティンという恋人がいるということ
だけだ。

恋人を大事にしているヴィンセントに対し好意的な感情を持つていたソフィアだが、馬車が停
まった大邸宅で行き先はここではないと言われ、さらに長いこと馬車に揺られ、着いた先のあばら
屋を見たときにはさすがに複雑な気持ちになった。

愛されていない身とはいえ、この家は困窮している実家よりもひどい有様だ。腕に抱えた箱の中
にあるネックレスのほうが、この家より遥かに値が張るだろう。一目で手入れされていないことが
わかる、一部屋根の落ちた家屋。まわりで咲き乱れるバラは美しいものの一切手入れがされていな
い。馬車の御者が申し訳なさそうにしているので、ソフィアは落胆を表に出さないように堪えた。
「ソフィア様の侍女たちは先に着いているようです」

「そうなのね。ありがとう」

あばら屋から目が離せないソフィアに、御者の若者が「何かトンプソンさんに言付けがあればう
かがいます」と問う。

聞きたいことは山ほどあるが、このあばら屋が全ての答えなのだとソフィアは口を引き結んだ。

父がバトラー家から大金をせしめたことはわかってい。父は自分の学校を運営することしか頭に
ないので、それ以外のことでは他人がどう思おうと気にならない人間だった。それに、誰に対しても
高圧的に融資の話を持ち出すので、どこに行ってもかなりの嫌われ者だ。港の使用権がほしいとい
いえ、あまりに法外な額にヴィンセントはすっかり嫌気がさしたのだろう。

すうつと息を吸い込んでから御者へ顔を向けた。

「何もありません。気をつけてお戻りくださいね」

御者の気まずそうな顔を見ているのはいたたまれない。この先、ずっとこのような同情と憐れみ
を向けられるのだと悟り、想像よりこの結婚が針の筵であることを理解した。

（お飾りの妻である覚悟はしていたけれど、ここまであからさまだとこたえるわ）

去っていく馬車を見送ったあとも、まだしばらくあばら屋から目を離せなかった。

木箱と花束とこの家が、結婚したソフィアに贈られた全てらしい。屋根は落ちてい、壁の漆
喰も剥がれているところがあるので直さねばならない。庭も自由奔放に育っている草木をなんとかし
ないと。打ち捨てられたのは妻だけで十分、家までそんな見た目をしている必要はない。

そのとき、玄関のドアが開いて見知った顔が現れた。幼き日からずっと一緒に育った侍女、キャ
サリンだ。その後が続くのは、その侍女と結婚したばかりの従者ベンジャミン。二人を見てやっと
ソフィアは心から笑みを浮かべた。気が緩んだのか、涙が滲む。

「フィフィ！」

ソフィアを愛称で呼ぶのは、この侍女夫婦と疎遠になった元家庭教師しかない。親しみのもった名で呼ばれ、ソフィアはますます泣いてしまいそうになった。鋼の鎧を纏っていた心の弱いところをつかれた感じになる。

「離れていて心細かったわ」

駆けてくる二人を待ちきれず、ソフィアも駆け寄っていた。

「私たちも心配でどうにかなりそうだったもの」

姉妹同然に育ったキャサリンは「嫌なことはされなかった？」と言ってソフィアを抱きしめた。

「ええ、全然されていないわ。えっと……強いて言うならば、この家のことが一番ひどいわね」

困った顔のソフィアとは違い、キャサリンは怒りを隠さなかった。

「聞いてよ！ ほら、あそこの屋根が落ちてるでしょう？ あそこは唯一のベッドルームよ。なのに雨ざらしだったから、何もかも駄目になっていて……信じられないくらいひどいんだから」

「部屋は何部屋あつて？」

「それがキッチンとベッドルーム、メイドルーム、それから玄関ホールのみ」

それは困ったことになった。ベッドルームが使えないなら、ソフィアの寝る場所がない。

「私の寝る場所がないのね。えっと、メイドルームの広さはあなたたち二人で使えそうなくらいあるのかしら？」

キャサリンとベンジャミンが顔を見合わせたあと、ベンジャミンが口を開く。

「新婚なので、くつついて眠れるのはありがたいです」

なるほど、ソフィアが思っているよりメイドルームも狭そうだ。

「とにかく……なんとかしないと。ベン、近くの街に行つて大工さんを雇ってもらえるかしら」

部屋の狭さより、屋根の問題を早急になんとかせねばならない。バトラー家から生活費としてどれくらい支給されるかわからないが、一刻も早く屋根だけでも塞がないと生活がままならないのは明らかだ。

ソフィアはキャサリンに案内されて屋内に入った。名ばかりのエントランスには暖炉と二人掛けのソファと一人掛けの椅子が二脚、それにテーブルがあるだけだった。ソファは傷んでいないので表に持つていつて、叩いて埃を払えば使えるという結論に達した。暖炉はベンジャミンが冬までに煙突掃除をやると言っていたらしい。次に隣のキッチンへ入っていくと、こちらは既に拭きあげられて綺麗な状態になっていた。

「到着して、まずはキッチンを掃除したのよ。長年使っていないのがよくわかる有様だったんですもの」

「使える食器類はあるのね」

洗いあげられて重ねられた陶器を見て言うと、キャサリンが「足りないものもあるから……さすがに少し揃えないと生活に支障が出ると思うわ」と、眉間に皺を寄せた。

「たとえば？」

「シルバーは壊滅的。あつても錆びていてどうにも使いものにはならなそう。陶器はそういう意味では長持ちするけれど、金属のものは駄目ね。大鍋も錆がひどいし。大鍋に突っ込まれていた小鍋は磨いたら使えるようになったけど、それだけじゃ毎日ジャムやソースしか作れないわ」

ソフィアは想像して笑ってしまった。それはなんともお腹が空きそうな日々だ。炬も掃除が終わっているのでソースは今日から作れると言つて白目をむいてみせるキャサリンを、ソフィアは抱きしめたくなった。

昔から苦難ばかりだったけれど、キャサリンの明るさや冗談がいつもソフィアを勇気づけてくれた。笑い話にしてしまえば案外苦しいとは思わないものなのだ。父に軟禁されているような生活だったし、衣類は貴族とは思えぬ粗末な生地でみすばらしいという言葉がピッタリだった。ソフィアを出産する際に母が命を落としたことを恨む父は、娘を忌み嫌い、屋敷の外に出ることを固く禁じていた。よつてソフィアには常に孤独が付きまとつていた。さらに、家計は火の車であつたから使用人もソフィアも食べることに苦労する有様だった。父の唯一の身内は彼が運営している学校だと言つても過言ではない。よつて全ての愛情と金は学校に注がれ、ソフィアはおろか使用人たちにも一切関心を寄せることがなかった。

幼少期を思い出しながら、ソフィアはキッチンの奥にあるメイド用の部屋に入つていく。ここは屋根が無事だったのでベッドの枠がしつかり残つていたとキャサリンが説明した。とはいえ、二人で生活するには手狭すぎる。ソフィアは首を横に振つた。

「狭すぎるわね。増築できるかしら」

金のこともあるが、持ち主であるバトラー家の許可を得ねばならない。

「増築するより、ベッドを新しくしたらいいと思うの。部屋いっぱいまでベッドとして使えば快適に暮らせるもの」

そんな部屋は聞いたことがないが、本人がいいと言うのなら名案だった。それなら増築も必要ないし、今あるベッドをソフィアが使えばいいのだから。

「では真つ先にベッドを新調しましょう。そうしたら屋根が直るまでエントランスホールにこのベッドを置けばいいわ。私はそこで寝るわ」

今度はキッチンの隣にある浴室を覗く。

「マスターベッドルームが一番ひどいことになっているなんて、あちらのお家の方は何を考えているのかしら」

そうぼやきながら、キャサリンは問題の部屋へソフィアを案内した。扉を開け、まずソフィアが笑つてしまったのは、その明るさだ。屋根がないものだから、太陽の恵みが存分に降り注いでいた。「すごいわね……こんなお部屋、きつとあとにも先にもこれつきりだと思ふわ」

苦笑するソフィアに、キャサリンが「もちろんですとも。もしこれ以上ひどいところへ移り住めだなんて言われたら、国中の貴族を呼び寄せてルームツアーを敢行しましょう。ほんと、皆にこの非道極まりないおこないを暴露してやるんだから」と息巻いた。頼もしいキャサリンの言葉に笑い

ながら部屋を見渡して、全てが色褪せて朽ちかけているのを確認した。使えるものが一つもないのは、ある意味潔い。

「ベッドを置いてもスペースがあるわね。どうやら食事をするところはエントランスホールか、ここにテーブルを置くかのどちらかしかないみたいだわ。私としてはキッチンの横のほうが使い勝手がいいと思うからエントランスホールでいいと思うのだけど、キャッシーはどう？」

キャサリンは手を腰に当てて「話のわかるご主人様だわ。もちろんキッチンに近いほうがいいわね」と答えた。

これまでもソフィアは家の使用人たちとキッチンで食事をとることがほとんどだった。だから、キッチンが近いことは皆にとって快適だということを知っていた。なんせ、熱々の食事が食べられるし、お代わりだってすぐにできるのだ。

「ねえ、フィフィ。このあばら屋で唯一気に入っているところがあるの」

キャサリンの表情を見て、ソフィアはそれがとてもいいことなのだと悟った。ソフィアの手を取ったキャサリンが「もう黙っておくのが大変だったわ」と引つ張って表に連れていく。子どもの頃のように手を取り合って表へ駆け出ると、家の横の茂みに連れていかれた。

「わあ、ラズベリーだわ！ しかもこんなにいっぱいあるなんて」

見たこともないほどのラズベリーの群生だった。自由気ままに生えているラズベリーの幹に赤い実がどつき下がついていて心が躍る。

「こんな家に住まわせるなんて思ったけど、これだけは最高だと思ったの」

ラズベリーは小さい頃から二人の大好物だ。ソフィアはクスツと笑い、「これでジャムもソースも確かに作り放題だわ」と言った。キッチンで見た小鍋を思い出したのだ。

「そうね、でもこれだけのラズベリーでしょう？ 半分はそのままお腹に入れてしまってもいいかもしれないわ。あの小鍋だけじゃ捌ききれないもの」

二人はやつと幸福感に満たされ、顔を見合わせて笑ったのだった。

結婚したときには瑞々^{みずみず}しい鈴蘭の花束だったものを、ソフィアはじっと見つめていた。今はドライフラワーになり、殺風景な部屋に飾られている。一つしかない飾りがかえって部屋を寂しく見せていた。

吐く息が白い。季節は巡り、もうすぐ新しい年を迎えようとしていた。

ソフィアはどうとう立ち上がって肩にかけていたショールを掴み、物入れ用の箱のところまで行って箱を開けた。中には着古したドレスと、結婚したときに受け取った木箱が入っている。木箱を取り上げると、そっと中身を確認した。真紅のルビーはもらった日と寸分違わぬ美しさだ。

「縁がないとはこういうことなのね」

ソフィアは一度も首につけることがなかったネックレスを手放す決心をしていた。今月に入り、家の修繕費や、家具代、おまけに食料品などのツケを払ってほしいとひっきりなしに商人たちがやってくる。散々支払いを待ってもらっていたソフィアだったが、とうとうバトラー家からは生活費の援助を頼めないのだと諦めたところだった。今のところ、結婚式でバトラー家の使用人に会ったのが最後で、それ以降誰一人としてやってこない。こちらから使いを出して無心するのは心苦し

いと思っていた。なんといつても父が莫大な婚姻金を請求したのだから金の無心は言い出しにくい。箱を手につんでいると、ドアをノックされた。

「どうぞ」

返事をする、すぐにキャサリンが顔を出す。

「居間に来てはどうかしら？ その部屋よりはまだ暖かいわよ」

正確にはエントランスだが、キャサリンの提案で居間と呼ぶようになった部屋への誘いだった。夜にならないと暖炉に火は入れないようにしているが、それでもキッチンの温もりでソフィアの部屋よりも暖かいのだ。

「ええ。ねえ、父から返事は来た？」

キャサリンは肩をすくめた。それが答えだ。何度か窮状を訴えてみたものの、父は言い訳の返事すら寄越さない。

「そう……。あの、ベンは今どこにいるかしら？」

キャサリンの夫ベンジャミンの居場所を聞くと、「薪^{まき}を作っているから表にいるわ」と返事が来た。ソフィアはどうとう決意を口にする。

「ベンと街へ行こうと思うの。結婚したときにいただいたネックレスを質屋に持っていくつもりよ。そのお金で支払いをして、ついでに冬の買い物——」

キャサリンは最後まで聞かずに、それは大きなため息をついた。そしてガクツとうなだれたが、

すぐに面^{おもて}を上げる。

「そろそろ言い出す頃だと思っていたわ。でもよかった、さらにドレスを質に入れると言い出しかねないからヒヤヒヤしてたのよ。そんなことをしたら着るものがなくなるもの」

そのとおりだ。細々と質屋にものを入れてきたが、もうネックレス以外質入れするものがない。最近ではキャサリンやベンジャミンが村に手伝いに行つて生活費を稼いでくれるようになった。それでも限界なのだ。

「来年の春は、私も農作業のお手伝いをしてみるわ」

ソフィアの言葉にキャサリンは首を横に振つて目をきつく閉じた。

「侯爵令嬢なのよ……。フィフィは泣き言を言わないけど、私のほうが泣きたくなるわ。どうしてフィフィのまわりの男たちはこんなにも非情なのかしら」

ソフィアは最近感じていることをキャサリンに言う。

「侯爵家に生まれたと思うから悲しくなるのよ。平民であれば、私の暮らしはまだまだ恵まれているじゃない？」

顎^{あご}を引いて顔をしかめたキャサリンがそれは違うと否定した。

「平民の自由さはないもの。身につけるものだってそれなりのものを世間では求められるわ。働きに行くことだって叶わないじゃない」

貴族の娘が平民と同じ仕事をするなど、確かに聞いたことがない。

「でもね、私は平民として生きるわ。パーティーに出なくていいのも気楽だし、割り切つて働きに出たら生活にここまで困ることはないんですもの。そうすることに決めたの」

そこでニツコリ微笑み、キャサリンに提案する。

「このネックレスを質に入れたら、ツケは全部払えると思うのよ。それに冬の分の食料や燃料も買えるはず。キャシーも一緒に街に行きましょう！ いつもなら買えないものを買うのよ。何がいいかしら」

この提案にキャサリンは乗らず、心配顔で本当に働くのかと聞いてきた。

ソフィアは力強くうなづく。

「街で仕事がないか聞いてみるわ。農作業は春までそれほど仕事がなくさうだけど、街で仕事が見つかれば冬の間もお金を稼げるもの」

キャサリンは人差し指を立てて振り回しながら代替案を出してきた。

「いい？ ツケが払えて、冬の準備もできるなら急いで働く必要なんてないのよ。こうしましょ。生地を購入してきてドレスを作るのよ。春までならなんとか一着作れるわ。ね？」

「またお金に困ったらそれを売るのね」

「そうよ。もしどこから生活費が入ったら、そのドレスは着ればいいんだもの。いい案だわ」

キャサリンはその案を自画自賛して、街に行くためにベンジャミンを呼んでくると部屋をそそくさと出ていった。

（本来なら自分の主人が働くなんて耐えられないものね）

つくづく、キャサリンには苦勞をかけていると感じてシユンとなった。結婚して、もしかしたら生活が楽になり、キャサリンたちにも苦勞させないで済むかもしれないと期待したこともあった。結局、状況は悪化し、キャサリンたちに情けない思いをさせていることにソフィアは落ち込まずにはいられなかった。

三人は揃って馬車に乗り、街へやってきた。幌もないただの荷馬車だが、これでさえ維持するのが精一杯なのだ。

現在住んでいるルードリル地区から街に行くには、馬車で三十分かかる。それほどかからないほうだが、帰りに荷物を持って帰るには荷馬車がないと困る。

「ほしいものが揃うといいわね」

ソフィアは膝の上に置いた箱に手をのせて、明るいい口調で言った。寒さで顔が強張って話しくいが、こういときほど話したほうがいいと知っていた。寒いときはじつとしているとますます寒くなる。

「毛織物と、毛糸と、香辛料、それから紅茶もほしいわ」

キャサリンがソフィアにそう返すと、「鶏を二羽買ったらどうだろう」とベンジャミンが言う。

「そうね。つがいで飼いましょう。そうしたら卵も手に入るし、いずれは肉にも困らなくなる

もの」

キャサリンが嬉しそうにベンジャミンに話しかけるのを見て、ソフィアはそれだけで温かい気持ちになった。二人が楽しそうにしてくれているのは救いだ。

（大事にすると誓ったネックレスを手放してしまうのは、さすがに気が重いわ……）

箱に置いた手が自然とそれを慈しむように動いていた。それでも二人にこれ以上迷惑はかけられない。

そんなふうに心を決めて質屋に行ったのだが、中年の店主はソフィアのネックレスを見て首を横に振った。

「こりゃあ、高価なものすぎますよ。うちじゃ扱えませんがねえ」

ソフィアはあてにしていた手前たじろいだ。が、気持ちを立て直して食いがつた。

「そこをなんとかお願いいたします。今日はお金を借りて買い物しないと、冬を越せません」

うーんと唸ったあと、店主がソフィアの顔をまじまじと眺めた。

「あなたは侯爵令嬢だと聞いていますよ。なぜにこんな片田舎に……いやまあ、いてもいいんですがね。確かバトラー男爵家に嫁に来たとか。ですが、バトラー家の皆さんはこのあたりには住んでおられんでしょう」

これが単なる好奇心なのか、ソフィアが本当にバトラー家の嫁かどうか怪しんでいるのか、ソフィアは判断がつかなかった。どう答えたものか困っていると、後ろに控えていたキャサリンがグ

イッと前に歩み出て店主を睨みつけた。

「何が言いたいのかしら！ ソフィア様は本物の侯爵令嬢ですし、今はバトラー男爵家に嫁いでおります。その証拠がそのネックレスだとおわかりでしょう？」

並のネックレスではないのは一目瞭然で、特に大きな真紅のルビーは相当金に余裕がなければ手が出せないものだ。

「いやいや、でもなんだってこんなところに住んでいるのか気になるところでしょうよ」

店主がまだそんなことを言うと、キャサリンもフンと鼻息荒くそっぽを向く。

「ヴィンセント様に恋人がいらっしゃるのは周知の事実。そんなことをソフィア様の前で言わせるなんて、失礼にもほどがあるわ。この方はね、侯爵令嬢なのに文句一つ言わずにあばら屋で暮らしているんです！ ヴィンセント様が恋人にうつつを抜き、まるで顧みないから！」

ソフィアは気まずかった。店主の憐れみの眼差しを感じながら、もう一度交渉しなければならなかったのだから。

「あの、そういうわけでどうしてもお金が必要なのです。分割でも構いませんので質にとつて下さいませんか？」

ソフィアが懇願したところで、店の奥から女性が顔を出した。

「あんた、どうにでもやりようがあるだろ」

店主は、茶色の髪を一つに束ねたその女性を妻だと紹介した。

「初めてお目にかかります、ソフィア様だったかしら。それにしても、ご苦労なさっているのですね。とはいっても実際、この店にはこれほど高価なネックレスに対価を出せるほどお金を置いているいません。ただ、こうしたらどうでしょうね。主人に首都までこれを持っていかせて、質屋に入れさせる。そうすりゃ金は用意できるでしょ。だから、今日はツケで買い物をするってことでどうでしょう。あとからうちの主人にそのツケを支払ってもらえば万事解決ってもんです。手数料はもらいますけどね」

それはありがたい提案だが、問題は既にツケが溜まっていてもう商品売ってもらえないかもしれないことだ。質屋の主人を待てるほどの余裕もない。

「既にあちこちツケにしているもので……むしろもうお金を支払ってほしいと言われているのです。だから、これ以上はツケにしてもらえないのではないかと——」

ソフィアは言いながら、どこまで恥をさらさなければならぬのかと頬を赤らめた。店主の妻は店主を肘でつついて「それは本物だろ？」と問い、「そこは間違いない」という答えを得る。

「じゃあ、その買い物にアタシが同行いたしましょう。アタシが一旦支払って、うちのツケにしとけばいいのさ」

今度はキャサリンが「それは本当にありがたいのですが、実は家の修繕費も払わなくてはならなくて。金額が大きいものもあるのです」と説明した。

「じゃあ、そこにも行つてうちが保証するからもう少し待ってほしいと言ってあげましょ」

店主の妻の気骨に、店主とソフィアたち三人は啞然とした。すると、店主の妻はソフィアを見てウィンクする。

「アタシはね、お飾りの妻を娶る男なんて大嫌いなんですよ。しかもさ、その妻にこんな思いをさせるなんて男の風上にも置けないやつだと思っちゃってね。ね、そうだろ、あんた」

急に話を振られた店主は慌てて「そ、そうだな」と答えた。主人はともかく、妻のほうはソフィアの立場を理解し、応援してくれるらしい。ソフィアはジンと心に感動が湧いてきて、体中に行き渡る気がした。

「ありがとうございます。私、このような親切を受けるのは初めてで、本当に嬉しく思います」

妻はカウンターの向こうから出てきて「噂は耳にしましたし、何よりそんなに寒そうなドレスを着て、嘘をついてるなんて思わないですもの。苦しいときはお互いさまってやつなんです」と言い、自分の肩にショールをかけた。本当に買い物に同行してくれるのだとわかり、ソフィアはただただ深く感動していた。

こうして善意を受けてソフィアたちはなんとか冬を越した。今ではドレスの注文をとって生計を立てている。

侯爵令嬢が町娘のドレスを縫ってくれると評判になり、売上は上々だ。とはいえ、今の生活はどこを切り取っても貴族であるとは言いがたかった。生まれてからずっと貴族らしい生活を送ってい

ないソフィアにとって嘆くことでもないが、注文をしてくれる人々には嘘を吐いているようで心苦しかった。侯爵令嬢という肩書だけで、華麗な生活を送るわけでもなく、素敵なパーティーに参加しているわけでもない。流行にもとことん疎い^とのだから詐欺を働いている気分だ。

ドレスを縫う傍らで、あばら屋の庭に人參、玉ねぎなど食べられるものを植え、ラズベリーはできるだけ収穫しジャムにして売ったりした。

そんな生活を送る中、キャサリンが妊娠した。ソフィアは大喜びしたが、キャサリンは申し訳なさそうに「侍女が一人しかいないのに……ごめんなさい」と謝った。

「謝らないでちょうだい。赤ちゃんが生まれるなんてこんな幸福なことあるかしら。知つてのとおり、私は家事を一通りこなせるから任せておいて」

キャサリンはそれでも困った表情のまま「こんなこと母が生きていたら許されなかったわ」と言った。キャサリンの母親はシューマン家の家政婦長だった人だ。ソフィアの母親代わりでもあった。

「いいえ、大喜びしてくれるに決まっているわよ」

「フィフィに迷惑をかけなければね」

ソフィアはキャサリンを抱きしめて、「迷惑じゃないわ。私の家事能力が上がるんですもの。私の家族なんて縁がなかったでしょう？ キャシーの子どもなら私の家族同然だもの。本当にうれしいわ」と励ました。

心から喜んでいるソフィアにキャサリンもやっと笑顔を取り戻して、「喜んでくれて嬉しいわ」と涙ぐんだ。

「フィィ！ 大変よ」

二回目の冬を迎え、新年が刻々と近づいていたある日、大きなお腹を抱えたキャサリンが慌てた様子で家の中へ飛び込んできた。その手には封筒がある。縫い物をしていたソフィアはそれを横目で見ながら、「走っては駄目でしょ。また請求書？」とのんびり答えた。

「違うわよ、バトラー家から手紙が来たのよ」

一年以上なんの音沙汰もなかったのだから、確かにそれは大事件だ。持っていた針を針山に戻すと、手を出した。そこにキャサリンが手紙を置く。見守られながら封を開けて手紙を広げた。

「これは……困ったわ」

「なんて書いてあるの？」

「王室主催のパーティーがあるから、参加するために家に来るようにということみたい。着ていくドレスがないのに、よりによって王室主催のパーティーだなんて……」

二人とも言葉もなく、見つめ合う。窮地だ。お金があればドレスを用意できるが——いや、そもそもドレスを持つていようが——パーティーに参加するような余裕はなかった。でも、これまでなんの連絡も寄こさなかったバトラー家からアクションがあつたことは、幸いだったかもしれない。

キャサリンのためにもなんとか支援を要請したいと考えているところだったのだ。ソフィアたち三人だけではどうしようもないところにきていた。かつて家庭教師だったグレゴリーがいれば、起死回生案を見つけてくれただろうが、機転の利く彼はもういない。

グレゴリーは没落貴族の家の出で、シューマン家に使用人として雇われていた。父親から本を与えられただけで勉強を修めると無理難題を課せられたソフィアを不憚に思い、勉強を教えてくれた人物だった。家庭教師役だったグレゴリーは、キャサリンと共にソフィアの心の支えだった。十五歳も年上で兄のような存在だったグレゴリー。笑うと肩が揺れ、一緒に赤毛も揺れるさまが今でもはつきりと思い出せる。父のおこないで世の中の人が全てそっぽを向く中、キャサリン親子とグレゴリーが人としての愛情や常識をソフィアに授けてくれたのだ。

ソフィアの人生はいい思い出が少なすぎるせい、小さな幸福たちはやたらと鮮明だ。グレゴリーのことも、あの転んだときに手を貸してくれた青い瞳の男の子のことも、実際に起こったときより補正されて輝いているのかもしれない。

「ドレスはないけれど、行ってみるわ」

キャサリンがソフィアの手を握った。

「駄目よ……もうこれ以上フィィに悲しい思いをしてほしくないわ」

平民より劣ったドレスで、男爵家とはいえない大いに成功している家に赴くのは確かに苦行だった。ソフィアは空いている手をキャサリンの手の上に重ねた。

「ねえ、私はキャシーのお腹の子を見たいし、元気に育ってほしいのよ。私はこのまま……もしかしたら子どもを持ってないかもしれないもの。だからね、どんなに惨めでも構わない。あちらに行つて、もう少し生活がマシになるように交渉してくる。キャシーだって私の立場ならそうするでしよう？」

キャサリンはもうほとんど泣いていた。真つ赤になった目は潤み、唇が震えている。

「そうかもしれないけど……辛いわ。この先どんなに貧しくても、私はフィフィについていく。それに五年後、きつぱり離縁してもらつて、いい相手を探しましょう。私だってフィフィの子どもを見たいもの」

ソフィアはふんわり微笑んだ。

「不思議ね。苦しいことばかりなのに、キャシーとベンがいてくれるから全然苦じゃないの。しかもここに小さな愛すべき赤ちゃんが加わると思うと幸せで仕方ないわ」

キャサリンはどうとう涙をぼろぼろと流し、手の甲でそれを拭^{ぬぐ}つた。

「もう、フィフィつてば泣かせないでよ」

「キャシー、それは違うわ。妊娠しているせいか最近涙もろいって言っていたでしょ？ それに、お腹が空いて仕方がないのでしょう？」

泣き笑いをしたキャサリンが「そのとおりよ！ お茶の時間にしましょう。スコーンを焼いておいたの。頭の中はいつだって食べ物のことばかりよ」と、冗談を言つてからキッチンにお茶の用意

をしに行つた。

（そうよ。今更どんなことだつて恥ずかしいわ。私には守りたいものがあるんですもの）

ソフィアにまるで興味がないう夫が結婚式でボールすら上げなかつたとしても、結婚式後にそのまま置き去りにされても耐えられた。

着古したドレスを見下ろしてから、窓の外を見やつた。葉のない木々が寂しく風に揺れていた。

窓の横の壁にはドライフラワーの鈴蘭が寂しそうにかけられている。

（最初からまるで好かれてないんですもの。恐れることなんてないのよ）

今夜は雪が降りそうだ。薪はもう節約したくない。キャサリンの体を冷やさないように、お金が、支援が必要だった。

翌日ソフィアは一人で街まで歩いていった。そして質屋の奥さんにどこかで馬車を用意してくれそうなどころはないかと尋ねた。

「馬車？ つてことは、ソフィア様はまさかここまで歩いてきたつてことですか！」

驚かれるのは予想していたので、用意しておいた理由を述べる。

「ええ。キャサリンのお腹には赤ちゃんがいるので、ベンジャミンにはキャサリンの近くにいてもらいたかつたのです。私は乗馬も馬車の扱いもできなくて……それで今度シュリアに行きたいのです。一頭立ての幌馬車なら私でもお支払いできると思うので、どこかに幌馬車を出してくださいの方

がいらっしゃいませんか？」

ソフィアのところにあるのは荷馬車のみで、この時期首都シュリアまで行くにはかなり無理がある。

「ないこともないかと……なぜ、こんな時期にシュリアへ？」

冬の旅は過酷だ。幌馬車では寒さは防げない。だからこそその疑問なのだろう。無理して行くには普通理由があるものだ。

「ヴィンセント様から呼び出されました。それで、どちらに行けば馬車を——」

「また、あの男！ 本当にシュリアに行くのなら、箱馬車じゃなければ駄目ですよ。アタシは絶対、それ以外の馬車は紹介できませんからね」

確かに箱馬車なら屋根も扉もある。この季節でも安心して首都に行けるだろう。貴族なら普通に使っているものだが、ソフィアは持っていなかった。

「でも、箱馬車だと料金が高すぎて」

質屋の奥さんは眉間に皺をくつきり刻んで、盛大にため息をついた。

「そんなのあらさんに支払ってもらったらいんですよ！ ソフィア様、ご自分の顔を見たことがありますか？ あなた、そんな綺麗な顔をさらけ出して馬車に乗ってごらんさいって、危なくって仕方ないわよ。野盗に狙われます。それにここまで歩いてくるのだって正気の沙汰ではないと思いますよ。攫さらわれたらどうするんですか！ そもそも、妻を呼び寄せるならば迎えの馬車を寄

越すのが紳士たるものの行動ではありませんか。なんてゲス野郎なのかしら」

一気にまくし立てる奥さんに、ソフィアはちよつと笑ってしまった。

「もう、笑いごとじゃないんですよ。絶対に箱馬車でなければ紹介しません。絶対に！」

笑いながらも困っていたソフィアに奥さんは言う。

「あのネックレス。質入れをしていますけど、いつそ売ってしまったらいんじゃないですかね？ そしたら利息の支払いもいりませんし、追加でお金も入りますもん。大事にとっておかなくてもいいでしょう。妻をこんなふうに扱う男からのプレゼントなんて、アタシならなんにもほしくありません」

初めて手にした高価なネックレスだった。奥さんの言うとおり、贈り主に気持ちがなければどんなに美しくても意味がない。それでもいただいたものを勝手に処分するのは道理に反していると感じていた。

「あれはあのままでいいのです。さっきのお話で確かに相手方に出してもらうのが筋だという気持ちになつてまいりました。気づかせていただいて、ありがとうございます」

質屋の奥さんは腰に手を当てて「じゃあ、名ばかりの夫に馬車代金を払わせるということですね。そういうことなら宿屋の主人に箱馬車を出してもらいましょう」と言い、手伝いの若い男を呼び寄せた。

そんなわけだと思いのほか快適な旅となったのだった。

途中、小さな町で一泊し、それ以外はほとんど移動に費やしたおかげで、一日半ほどで首都シュリアに到着した。その頃にはほぼ日が暮れていたが、シュリアは治安がいいので、そのままバトラー家の邸宅へ送り届けてもらった。家の前に馬車を横付けすると、夜にもかかわらず従僕が飛んできて、ソフィアが馬車から降りるのに手を貸した。次いで執事も出てきて、馬車の御者と少し言葉交わしてから恭しくソフィアに挨拶をする。

「お久しぶりでございます、奥様」

トンプソンの挨拶に猛烈な違和感を覚えたソフィアは、努めてやんわりと「ソフィアと呼んでくださるとありがたいです」と伝えた。立場上はそうかもしれないが、ソフィアの立場は『奥様』とはかけ離れている。

「かしこまりました。ソフィア様。何かお召し上がりになりますか？」

家のあちこちに火が灯されている時間帯だ。使用人たちはもう仕事から離れているはずなので、ソフィアはそれを断った。腹は空いていたが、そんなことは日常茶飯事だ。

「少し疲れましたので休ませていただきたいわ」

そして意を決し、トンプソンにここまで連れてきてくれた御者に手当てを弾んであげてほしいと言ってみた。

「もちろんでございます。今夜は家に泊め、明日帰路に就かせることにいたします」

ソフィアのことは冷遇するが御者にはきちんと対応してくれると知って胸を撫で下ろした。御者

のほうがソフィアより数倍疲れているはずだ。

「ちょっと失礼いたします」

トンプソンとの会話を一旦やめて、御者のもたれに行く。

「ここまで連れてきてくださってありがとうございます。ここでお別れですが、気をつけて帰ってくださいね」

「賃金はこつちで払ってもらえるらしいです。聞きましたか？」

御者の言葉に思わずソフィアは破顔し、よかったと呟いていた。ソフィアが安堵するのを見て、御者もニッコリ微笑んだ。

「ソフィア様、食事時に交わした会話は忘れません。とても楽しかったです」

食事を共にするたびに御者とは仲良くなっていた。特に鶏の飼いを教えてもらったのは助かった。ジョークを交えて楽しく話してくれたことをソフィアは感謝していた。気の乗らない訪問を楽ししい時間で癒やしてくれたのだ。

「私も。またあちらに戻った際にお会いできるのを楽しみにしています」

二人が和やかに別れの挨拶を交わしているのをトンプソンがじっと観察しているなどと、ソフィアは知る由もなかった。

バトラー家のベッドはこれまで味わったことのないふかふか具合でソフィアは落ち着かなかった。

それでも長い時間馬車に揺られていた体は疲れていたらしく、いつの間にかぐっすり寝入っていた。朝、起こしに来た侍女に何度もドアをノックされるまで起きなかったのはソフィアにも意外だった。飛び起きて、着替えを手伝ってもらいながら「ヴィンセント様にお会いしたいのですが、ご在宅かしら？」と質問してみる。侍女はコルセットの紐を引きながら答えた。

「はい。もう既に家で書類の整理をなさっております。朝は前日に残した書類仕事を片付けるスケジュールになっているようです」

名目上は妻ではあるが、ソフィアはヴィンセントのことを本当に何一つ知らない。執事ならまだしも侍女よりも知らないことさえ明白だった。なんといつても顔すら知らない間柄なのだ。

「では、お手すきの時間にお話がしたいと伝えていただけるかしら」

侍女の手が止まる。

「お忙しい方でスケジュールを変更することを嫌がられるので……」応お伝えしますが」

望みは薄いことをやんわり告げられて、ソフィアは「そうなのね」と短く答えた。

侍女は気を取り直したように明るく「今夜はパーティーでございますね。ソフィア様はこのような美貌の持ち主なので、それはそれは噂になるでしょう。楽しみでございます」と言った。水を差して悪いが、ソフィアはどうしてもその話題になると心が沈んだ。

「それが……ここまで来ておいて言いにくいことなのですけど、パーティーの参加は控えさせていただくと考えているのです」

侍女の返事は「まあ……」だった。予想外だったのは百も承知だ。ここまで来ておいて、参加しないなんて驚かないほうがどうかしている。

「そのこともあって、ヴィンセント様にお会いしたいのです」

侍女は焦ったように「そうなのです。ではヴィンセント様には至急お話ししたいことがある旨をお伝えしておきます。だってパーティーは今夜ですもの……」と答えて少しだけ手を速めた。

侍女はソフィアのドレスが質素なことに気がついていないのだろうか。もしかすると普段は儉約家でパーティーのときには豪華に着飾ると考えているのかもしれない。

「あ、そうでした。パーティーの前にヴィンセント様のお姉様がこちらにいらっしゃるそうです。ソフィア様に挨拶したいということでございました」

それは青天の霹靂だ。ヴィンセント以外のバトラー家の人々に会うことなどないと思っていたので、予想外の事態に緊張してきた。

それを感じ取ったのか、侍女が励ますように言った。

「シャロット様は気さくでいい方ですよ。結婚なさってこの家からは出ていますが、ときどき帰ってこられるので私共はそれを楽しみにしております」

侍女がそう言うのだから、ヴィンセントとは異なり、社交的なだろう。いや、ヴィンセントだってソフィアを相手にしていないだけで、他の人には感じのいい人なのかもしれない。

「それはとても楽しみです」

ヴィンセントの姉にも相手にされないことを想像すると気が重いが、口ではそう言ってみた。侍女はドレスを着つけると髪も慣れた手つきで結い上げ、ヴィンセントに伝えるに行くと言って部屋を出ていった。

入れ違いでやってきたのは、以前会ったことのある家政婦長だった。この大きな屋敷の中では仕事を分業しているはずなのに、どうしてわざわざ家政婦長がやってきたのかソフィアは訝しんだ。だが、朝食を持ってきたと言われたら何も返せない。納得しないまま大人しく部屋にあるテーブルに着いた。

トレーには紅茶ポットがのっており、注ぎ口からはうっすら湯気が上がっていた。まだ温かいらしい。それに焼き立てらしいスコーンの香り。昨日の昼に食事をとったきりだったので、これには無条件に体が反応する。口の中に唾液が染み出てきた。

「いい香りですね」

声をかけたが、無視された。そうしてやっとこの家政婦長ガルシアがどうやらソフィアを相当嫌っていたことを思い出した。

カチャカチャと音を立てる皿、スコーンに添えられたクリームクリームの横には艶やかなブルーベリーのジャム。ガルシアに嫌われていようと、美味しいものを前にしたら食べたい欲がむくむくと湧き上がってきた。

お茶が注がれ、ソーサーごとソフィアに手渡される。

「ありがとうございます」

会話にならないとわかつてはいるが、ここで何も言わないのは違う気がして礼を言った。

「なんで私がこんなみすばらしい人にお給仕しなければならないんだか」

声は大きくなかったが、しっかりと聞き取れた。ギョツとするソフィアをガルシアは見つめると、首を横に振り理解できないというリアクションのあと、また一言も話さなくなった。

ソフィアはまだこれからヴィンセントに金の無心をするという大仕事が待っているのに、今すぐキャサリンたちのもとに戻りたくなかった。あばら屋だと思っていたあの家が今は恋しくて仕方がない。

ヴィンセントが部屋から出ると、廊下で侍女に呼び止められた。これから港に行く予定だった。貿易船が帰港したので船の傷み具合をチェックしなければならぬ。

「急ぎか？」

夜は妻を連れて国王主催のパーティーに出るよう父親に命令されている。目が回る忙しさだ。そもそも妻を人前に連れていくつもりなどなかったのだが、父は、爵位を買ったと陰で言われるのはヴィンセントが妻を公おかしの場に伴わないからだと責めた。